令和２年度第２回前近代小部会議事録

日　時：令和３年１月６日（水）15:00～16:00
場　所：北海道庁別館　９階 第１研修室（リモート開催）
参加者：谷本小部会長、川上委員、越田委員、蓑島委員、
中田委員、松本委員、
道史編さん室（靏原、杉本、伊藤、和田）

１　開　会
谷本小部会長あいさつ

２　議事
（１）北海道史・アイヌ史の時代区分論をめぐって

（２）その他

３　閉　会

1　開　会

〇谷本小部会長

・令和２年度第２回北海道史編さん委員会概説部会の前近代小部会を開催する。本日は大変お忙しい中をご参加いただき、また感染症の流行が収まらない中、リモート形式での開催にご理解いただいた。

・この小部会では、北海道史の前近代史を概説として叙述するに際して、どのような時代区分に沿って叙述するかを目下の検討課題とし、これまで慎重に検討を進めてきた。前回の小部会では、その参考の一つとして、国立アイヌ民族博物館におけるアイヌ史展示の考え方についてのレクチャーをいただき、論点を委員間で共有したところ。

・今回は前回の議題を受け、「北海道史・アイヌ史の時代区分論をめぐって」という議題を設けた。始めに私から議題に関わるいくつかの論点を紹介させていただき、次いで蓑島委員に、同じく議題に関わる先行する試みの論点を整理、紹介していただく予定。

・今回は、『新北海道史』における先史と歴史に関する論点の紹介と、過去に試みられてきたアイヌ史の時代区分に関する論点の整理・紹介の機会としたい。前近代の北海道史の叙述、とりわけ時代区分の方法についてはすぐに結論を出さず、今後も様々な形で委員の方々と慎重に議論を深め、より良いスタイルを定めていきたい。今回はその糸口の一つとして、この議題に関連したジャンルに関する話題の提供・共有を行いたい。

2　議　事

（1）　北海道史・アイヌ史の時代区分論をめぐって

〇谷本小部会長

・「北海道史・アイヌ史の時代区分論をめぐって」について、まず最初に、私から若干のお話しをさせていただく。

・前近代の北海道史を考える際の論点について整理すると、一般的に歴史を叙述する際にしばしば問題となるのは、叙述するときの主語をどこに置くかということ。例えば、地域を主語に置く場合は地域史、国家を主語に置く場合は国家史、家族を主語に置く場合は家族史、個人を主語に置く場合は個人史、企業の場合は社史になる例が挙げられる。

　私たちが取り組んでいく北海道史は、北海道の歴史であるから当然地域史となる。一方、北海道史を国家史の観点から叙述するとした場合、前近代史は北海道の前なので、前史としての位置付けになる懸念がどうしても生じる。あるいはアイヌ民族と和人をどのように前近代史で叙述するのかという課題も、前近代の北海道史の地域的個性を考える場合には、検討すべき論点として挙げられる。

・『新北海道史』ではこうした問題をどのように叙述したか、51 年前の成果になるが改めて振り返る。『新北海道史』通説編は、松前藩成立以前、松前藩、第

一次幕領期、松前藩復領期、第二次幕領期、開拓使前後、三県一局という時代区分が行われており、ある意味わかりやすい。この考え方は、表②の中の①『新撰北海道史』、つまり 1937 年当時の考え方を踏襲しており、いわゆる和人支配の変遷で時代を区切っている。

・ただ松前藩成立以前に関しては、考えるべき論点が含まれている。まず「先史時代」があり、次に「アイヌ」「和人の渡道」「安東氏」「蝦夷島の乱と蠣崎氏の台頭」という形で進んでいくが、重要なのは「和人の渡道」以降が「歴史時代」と認識されていること。「和人の渡道」以降は、いわゆる和文の文献（古文書・古記録）によって叙述がされ、日本史が北海道にどのように及んでいったのかという形で叙述が進められるという構造。

　先史時代も、先土器文化・縄文文化・続縄文文化・擦文文化・オホーツク文化とさらに分けているが、その後に「アイヌ文化（歴史時代）」と書いてある。つまり歴史時代というのは和文の文献で書けるいわゆる日本史で、その日本史が書ける時代に先史時代が継続しているのが、アイヌ文化だという説明になっている。これが『新北海道史』の全体構造。

・このような組み立て方は、1970 年代当時、どのような認識に基づいていたかを振り返る。『新北海道史』通説編の先史時代は、北海道大学にもいた考古学者の大場利夫氏が監修・指導されたが、氏の認識は著書『北海道の先史文化』（1973 年刊）で示されている。そこには「北海道の先史文化というのは、近世までアイヌ文化として残存していた」と書かれており、こうした認識で『新北海道史』の叙述が組み立てられていたことがわかる。

・この考え方は大場氏の独創的な考えではなく、河野広道氏の「北海道の先史文化」という論考や、後藤寿一氏による戦前の論考である「北海道の先史文化についての所見」でも同じような認識が示されている。このような研究状況の中で『新北海道史』の時代区分が組み立てられていたことを確認しておくのも、意味があるのではないか。

・本論とはややはずれるが、レジュメに 1882 年の福沢諭吉の新聞評論を載せた。「…（アイヌ民族の子弟を）教育しても我慶應義塾上等の教員たる可からざるや明なり…」と、個人ではなく民族の生まれによって資質の優劣があるという考え方が示されている。現在の観点からは荒唐無稽な認識だが、当時はこうした社会進化論に基づく考え方が、科学的な議論として提示されていた。このようなこととも、アイヌ民族の歴史を先史時代の「残存」と位置付けた視点は、おそらく連動すると思う。現在の倫理基準で当時の位置づけを評価するわけにはいかないが、『新北海道史』の叙述の背景にこのような視点があったであろうということは、自覚しておきたい。

・『新北海道史』以降の時代区分の試みにはどのようなものがあるのか、表②で簡単に振り返る。北海道の前近代の歴史、とりわけアイヌ民族の歴史がどのように区分できるのか、そのモデルとして③④⑤をピックアップした。③は佐々木利和氏のもので、口承文芸と文献史学の成果の上に成り立っている。④は河野本道氏によるモデルで、文化人類学や考古学の成果に基づいた区分。⑤は宇田川洋氏による区分で、考古学の編年として提起されたもの。区分の

時期が同じものもあれば違うものもある。これは2004年に私が整理したもので、その後議論は進んでいるが、まだ共有するような区分は出来ていないという状況。

・近年の文献史学による「アイヌ史」の時代区分の試みとして、蓑島氏、中村和之氏、それから私の定義も示しておく。例えば中村和之氏は14世紀から18世紀をアイヌ史上の「中世」と定義し、私は17世紀から1875年をアイヌ史上の「近世」と考えているため、時期が重なっている。アイヌ史上の「近世」の下限については、私は1875年くらいまでという見解だが、佐々木利和氏は明治維新が重要な画期だとしており、必ずしも合致しているわけではない。アイヌ史のうえで古代、中世、近世、近現代をどのように考えるか、またこうした4分法による区分自体が妥当なのか、見解の相違がどのような見解に基づいているのかを考えながら、イメージを進めていくことも必要。他にいくつもモデルが出ており、様々なモデルを比較検討して考えていくことも、北海道の前近代の歴史を考える上で必要な作業。

・以上、『新北海道史』の時代区分と、その前提にあったと思われる研究状況、『新北海道史』後に出てきた「アイヌ史」に関する時代区分のモデルについて整理した。

・次に、蓑島委員からお願いします。

○蓑島委員

・谷本小部会長から総論的、概括的なお話があった。私は過去の学説が、どのような意識のもとに前近代の北海道史やアイヌ史の流れを描いているか、紹介させていただく。特に、谷本小部会長の比較表にあった先行研究を、少し詳しく取り上げる。また、アイヌの精神文化や口承文芸も以前から論点として挙げられており、歴史学的な時代区分に反映させるのは困難もあるが、試みも随所でなされているので、今後に向けたヒントとして参照する意義があると考える。

・近年では、谷本小部会長から紹介のあったいくつかの見解や、瀬川拓郎氏などの新しい時代区分の試みなどもあるが、ここでは20世紀の先行研究を中心に紹介する。

・知里真志保氏が1950年代に発表した「北海道の先史時代人の生活に関する文化史的考察」という口承文芸に基づく研究は、今ではそのまま生かすということも困難が多いが、その発想は今日の目から改めて光を当て、再検討する意義が多分にある。

・口承文芸・口承文学を柱とする時代区分について、周知のことかもしないが、やや詳しく紹介する。枠組みとして、アイヌ文学の形態分類には韻文物語と散文物語があり、韻文物語には「カムイユカル」、「オイナ」、「ユーカラ」（人間のユーカラ）があり、散文物語には「ウエペケレ」などがあるが、知里氏が1950年代に提起した枠組みは、単なる形態分類にとどまらず、「アイヌ史」を反映するものとして認識されていることが興味深い。カムイユカル、オイ

ナ、ユーカラ、ウエペケレなどは、それぞれの時代の社会の発展に応じた形態として、歴史的な意味を持ってくると知里氏は述べている。

・形態分類に歴史的な前後関係があるということを論証しなければ、本来こうした議論はできないが、知里氏は「第一のカムイユカル」（神謡）を第一にもってくる。このあたりは私の専門ではないので解釈が間違っているかもしれないが、金田一京助が折口信夫からヒントを得て展開した、「神から託宣を受けたことが文学の発祥で、その最初のものとしてカムイユカル（神謡）がある」という考え方に、知里氏も基本的に則っているかと思う。カムイユカルは、人間が特定の動物と親類であるとする、いわゆるトーテミズムの社会、原始共産制の行われている血族的な小集団の社会を背景に生まれた物語だろうと、知里氏はいう。

・次の段階として、神謡からオイナへという歴史的な変遷が実際に辿れるかどうかということでは、知里氏は「自然神から人格神に主人公が変わって、物語も大きく変わってくるのだ」とする。これは「集団社会の中で階級が分化して、支配する者と支配される者が区別され、その中から強い個性が自覚され」、「自然の力に対する人間の力の優越が自覚されてくる。そういう中でオイナが生まれてくるのだ」という。また「主人公であるアイヌラックルは、シャーマンであり酋長でもあった」とし、「オイナを産んだ背景の社会としては、シャーマン酋長の支配するところのシャマニズムの爛熟した社会が考えられるのであって、それはある考古学者が主張するような、部族的大酋長のもとに原始的な焼畑農業などの行われていた社会であったかもしれない」と述べる。知里氏は、農耕以前／以後ということを一つポイントに考えているかと思う。この「ある考古学者」が誰なのか、私は見つけられていないので、ご存知の方がいればご教授いただきたい。

・続いて、人間の英雄を主人公とするユーカラの時代が来るとし、著名なヤウンクルとレプンクルの抗争に関する説が述べられる。レプンクルはオホーツク文化、ヤウンクルは擦文文化であって、民族的な抗争の物語であり、これを歴史的・社会構造的に見ていくと、「渡来の異民族と戦うために各地の酋長が集まって族長会議をやっている」「すでに部落連合のようなものがあり、総指揮者を立てて戦っているのであり」、それが「共通の敵に対する団結を通して同族意識を高揚し、自覚し、そこに後世のアイヌという一つの民族を形成する地盤が作られていく」という枠組みが提示される。

・第四の散文の物語では、ユーカラでは半神的超人であって完全な人間ではないけれども、ウエペケレに出てくる主人公は完全に人間になり、これは「松前交易にも出かけて行く」ような「実在のアイヌのコタンと酋長の物語だ」という。

　そのままを今日の研究状況で使うことは難しいが、ヒントになるような着眼点が盛り込まれているのではないか。

・次に考古学の側から、桜井清彦氏の 1967 年の時代区分を紹介する。桜井氏は「古代のアイヌ」「中世のアイヌ」「近世のアイヌ」「近代のアイヌ」という枠

組みを提示しており、1960 年代にアイヌを考古学の側から古代・中世・近世・近代と区分する枠組みがあったということでは面白い。その画期を鎌倉時代・江戸時代（家康黒印状）・明治維新とし、日本史年表に則って時代区分している。

・「古代のアイヌ」の章では、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化の項をたて、続縄文文化をアイヌ史の出発点とする。ただそれは、アイヌ史独自の基盤によって論を展開するというよりは、米作に適さないことから、稲作農耕の東漸の中で後進地帯になったことを「古代のアイヌ」の出発点としており、日本史に軸足を置いた考え方が基盤にある。

　また、カマド等の住居構造から、「本州文化がいかに強力に影響したかがうかがえよう」という論点が提示される一方、神聖記号、擦文土器の刻印などがアイヌ文化の中のイトゥパに属するものだと考えて、「擦文文化とアイヌ文化の間には連続が見られるようだ」けれども、「そのままの形でアイヌ文化へと展開したわけではない。本州からの影響とともに北方大陸からも強い影響があったに違いない」と述べる。

・宇田川洋氏による 1980 年の『アイヌ考古学』でも、独自の着想が展開されていて、「中世考古学」と「近世考古学」ということを提唱する。「50 年程前、駒井和愛氏は“アイヌ考古学”というものを考えておられたようである。擦文文化の研究に対して狭義にアイヌ考古学をいっているようである」が、「拡大解釈するように提唱したくなる」という。つまりアイヌ考古学は擦文文化の後を呼ぶものだという考え方が駒井和愛氏によって提示されていて、宇田川氏もそれを継承すると言う。

・さらにそれを中世と近世に分けるにあたっては、「内耳土器文化」を中世、「チャシ文化」を近世とするアイデアを提示する。

　宇田川氏の考え方については後の著作でも紹介するが、チャシ文化という概念は琉球史の「グスク時代」の考え方とも対比され、参考になる概念として興味深い。

・佐々木利和氏は 1995 年及び 1982 年の論文で、時代区分を提示している。「古アイヌ文化期のうち考古学的古代は、縄文時代、続縄文時代といった先史時代で、文献史的古代というのはえみし（蝦夷）と呼称されていた時期を中心とする」とし、「前アイヌ文化期はオホーツク文化期と擦文文化期で、アイヌ文化直前の、そしてアイヌ文化形成に大きな影響を与えた時期をいう」と述べる。

・さらにポイントになる論点として、「アイヌ文化が大きく変容するアイヌ史的現代」ということを言っており、近年のアイヌ史的古代、アイヌ史的中世、アイヌ史的近世などというタームは、佐々木氏が最初に着想を示されたものかと思う。

・「日本史の古代・中世・近世・近代・現代という時代区分や旧石器、縄文、続縄文、オホーツク・擦文、近世アイヌという北海道考古学の編年では、なぜ

いけないのか」「やはりその民族の特性を充分にいかした時代区分が必要なのである。そうでないとアイヌの歴史はいつまでたっても日本史や北海道史の枠内から離れることはできない」とか、「将来的にはアイヌの歴史の時代区分には古代・中世など５つの時代が必要かとか、アイヌの近代や現代はどう捉えられるのかとか、アイヌ文化史や社会史、政治史との関連はどうするかなどという議論が行われるはずである」とし、いわゆる古代、中世などの区分がよいのかどうかということも論じている。

・また、「アイヌ文化期は、考古学でいう近世アイヌの時期であり、日本史の中世ないし近世と併行する時期でもある」とし、それを前期と後期に分け、画期をコシャマインの戦いとする。

　その考えを少し詳しく見て行くと、佐々木氏は 1982 年の論考の中で、アイヌ文化期を「ユーカラの時代」「蝦夷地の平和時代」「ウェペケレの時代」「役蝦夷の時代」に細分しているが、そのうち「ユーカラの時代」と「ウェペケレの時代」には二つの大闘争時代があったとする。第一次大闘争時代はコシャマインの戦いからショヤコウジ兄弟やタナサカシ、タリコナなどの闘いの時期で、「ユーカラの主要モチーフがこの大闘争時代に求められる」と述べ、「夷狄之商舶往還之法度」に代表される平和・安定期の後に第二次闘争時代があり、それはシャクシャインの戦いの前史からクナシリ・メナシの戦いまでとする。この時代がウェペケレの主人公になるということで、海保嶺夫氏とは違う考えを提示していると思う。

・河野本道氏による 1996 年の『アイヌ史／概説』では、時代区分のための独自の概念が使われるが、実質的にはそれらは従来の時代区分とある程度対応関係がある。「前近代先古層期」は「旧石器時代」にほぼ相当するが、「前近代古層期」は縄文から道南十二館ぐらいまでの非常に幅広い時代であり、その後を「前近代変容期」、「近現代」としている。前近代変容期と近現代の画期を北海道旧土人保護法としているのが一つポイントである。

・河野本道氏は「前近代古層期」を手厚く叙述しており、特に「北海道島風文化」と言っているのはほぼ続縄文文化に当たるが、「この担い手がアイヌの範囲に含まれるのは当然」とし、「もし他からの影響があまり強くないアイヌ文化を求めるとしたら、まだ「半異風文化期」（擦文文化期）を迎えていないこの時期まで遡る必要がある」と、アイヌ文化の歴史の中でも続縄文文化の時代を特に重視していることがうかがわれる。

　また、擦文文化の時代、あるいはオホーツク文化の時代も、アイヌ文化の範疇に含まれる一時期の形態であるとし、「北海道島域の古来民であるアイヌ諸集団」という表現をしている。

・宇田川氏の 2001 年の『アイヌ考古学・序論』では、更に詳細が述べられる。1980 年の著作では内耳土器時代が中世で、チャシ時代が近世という考え方を示したが、こちらでは原アイヌ文化を内耳土器時代とチャシ時代に区分している。

またアイヌ文化には三つの段階があって、後期の 17～18 世紀ころまでを「原アイヌ文化」とし、その後近現代となり、変容を迫られつつも現在まで続いている段階を「新アイヌ文化」と提示する。

・なお、「前期アイヌ文化」の 14～15 世紀は内耳土器文化の時代で、これは遺構を持たない、伝承や地名に残るカムイチャシの時代。16 世紀は実在のチャシがある時代で、「中期アイヌ文化」。17～18 世紀にはチャシが多くなり戦闘用に使用されるが、この時期が「後期アイヌ文化」で、物質文化からそう言えるという。チャシの機能的な強化は、民族的自集団意識の高揚と対応するとし、コシャマインの戦いの頃がエスニック・アイデンティティの意味で重要な時期で、17 世紀以後のチャシの発達はさらにエスニック・アイデンティティの確立・高揚を反映すると述べる。

・また渡辺仁氏のクマ祭文化複合体論を検証し、アイヌ文化を流通経済的側面、社会的側面、宗教的側面の三つに分けて全体像を論じるが、特に精神文化と宗教的側面の重要性を強調し、「そこに、アイヌ文化の独自の論理と価値がある」と述べたところにも、あらためて注目してよい。具体的な内実については議論が分かれるところだと思うが、「その源流は擦文文化あるいはオホーツク文化にあって、社会的基盤は擦文文化に、精神的基盤はオホーツク文化に置いていた感が強い」という見通しを示している。

・擦文文化からアイヌ文化への変遷過程については、「竪穴住居から平地住居へ、すなわちカマドから炉へ、それに伴って甕形土器から内耳をもつ鍋へ、という図式で捉えることができそうである」とし、擦文文化期の終焉を「容器革命」「脱土器文化という歴史変革」と捉え、それには津軽十三湊の流通経済的な役割が大きいのではないかと、歴史的事象と組み合わせて考察している。

同時に宇田川説で面白いのは、火の神の信仰について、「いつごろ確立したのであろうか」という問いを投げかけている。擦文文化の時代のカマドの向きは本州と異なり、多くは東から南の方位に設置されたが、それはアイヌの国土創造伝承に基づく東側を重視する世界観と繋がっているのではないかと、精神文化に着眼した論理展開がみられる。

・以上、ほぼ紹介に徹したが、20～50 年以上前の諸見解の中にも、改めて光を当てるべき着眼点があると考えている。

○谷本小部会長

・蓑島委員からお話しをいただいた。大変重厚な整理で学ぶことばかり。冒頭に話したとおり、今回はアイヌ史の時代区分に関する紹介が主ですが、前近代北海道史の叙述に関して重要な論点は他にも多々ある。委員の方々には、今回紹介した論点を共有し、今後の検討のための素材の一端としていただきたい。

（２） その他

○靏原室長

・前回８月に開催した前近代小部会以降の編さん事業全体の動きについて、資料に基づき報告する。

令和２年度第２回北海道史編さん委員会が、11 月５日に開催され、主に 2022 年度末に刊行する最初の道史、『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について審議した。未確定部分の多い素案ではあったが、各章の節目構成と、どのような資料を取り上げるかを提示し、委員会ではそれに対する指摘や意見をいただいた。来年度の委員会では、指摘された点を踏まえて改めて構成と掲載資料を仕立て、審議・承認を経て印刷刊行の作業に入るという流れになる。このように、道史編さん委員会の確認を得ながら進めるという作業工程で毎年刊行していくことになるので、承知いただきたい。

・『北海道現代史』資料編の収録要領は、10 月に企画編集部会で決定され、今後は通史編も、企画編集部会が中心となって今後執筆要領が定められることになる。『北海道クロニクル』に関しては、より一層道民にわかりやすく書かれるということで、前近代小部会・近現代小部会共同で別に執筆要領をご検討いただくことになる。

・北海道史年表については、『新北海道史』で刊行された年表を増補・改訂して編さんすることが決定しており、事務局中心で作ることになっている。ここ１～２年で集中的に増補・改訂作業を行う予定で、令和３年度末には、以前の年表に 30 年分を足した 2000 年までの年表を、暫定版として電子で公開したいと考えている。最終的には、これに 20 年足した 2020 年までの年表を、最終年度の 2027 年度に完成させる計画。

とりあえずは、暫定版であっても、現代の表現に馴染まない部分が若干あるので、今の時代に堪えうる表現に置き換える作業を行いたい。前近代の部分に関しては、本小部会の委員の方々に作業のご協力をお願いしたい。

また、前近代はこの 50 年で大きく研究が進んだ部分もあるので、最終的な公開までに既存の北海道史年表を一度見ていただき、付け加えるべきもの、修正がどうしても必要なものをあらかじめ点検しておいていただけるとありがたい。記述の根拠となる出典を示すことになっているので、それなりに時間のかかる作業になると思う。

なお、暫定版を含む道史年表や『北海道現代史』は、紙媒体だけでなく、道立図書館が所管している「北方資料デジタル・ライブラリー」で公開する予定で、道立図書館と打ち合わせを進めている。

・道史編さん機関誌「北海道史への扉」第２号の構成をお知らせする。各部会から執筆する委員を出していただいているが、本小部会では今回、谷本小部会長に余録を書いていただくことになっている。原稿の締め切りが２月 10 日、配信が３月 25 日の予定で、全体のボリュームは前回と同じ程度を想定している。

・現代史の各部会では現在、資料編のための資料調査が盛んに行われている。概説の部会ではそれほどの調査は想定していないが、必要であれば随時調査

できるので、事務局にご連絡いただきたい。なお、『北海道クロニクル』には写真図版を多く使用するという方針があるので、掲載する写真が必要な場合、対象が特定できれば事務局のみで撮影も行う。

昨年２月以来、コロナの影響で『現代史』の資料調査がなかなか進められず、翌年度回しというものも出てきている。予算執行の関係上、あらかじめ希望を言っていただければ対応しやすくなるので、ご協力をお願いしたい。

３　閉　会

○谷本小部会長

・年表作成への対応については、委員の皆さんよろしくお願いします。
全ての議題が終わりましたので、これで本日の小部会を終了します。引き続きご尽力のほどお願いします。

（以上）